

調査報道の新たな方法を模索する ワセダクロニクル 挑戦の9か月

ワセダクロニクル
渡辺 周 編集長

早稲田大学政治経済学部を卒業後日本テレビに入社。2000年から朝日新聞記者。製薬会社の医師への資金提供の実態を報じたほか、原発事故後の長期連載「プロメテウスの民」取材チームの主要メンバー。2016年3月に退社し、ワセダクロニクルの編集長となった。



江戸川大学
隈本邦彦 教授

1980年から25年間、NHK記者・デスクとして、主に医療、科学、災害関係のニュース取材やドキュメンタリー番組制作を行っていた。科学コミュニケーション、科学ジャーナリズムが教育研究のテーマ。



11月3日、江戸川大学駒木祭で、講演会『ワセダクロニクルの挑戦～日本に調査報道メディアは根付くのか～』が開催された。国内初の大学を拠点とした調査報道メディア「ワセダクロニクル」の編集長を勤める渡辺周さんと、聞き手としてメディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科隈本邦彦教授が登壇し、設立から9か月間の調査報道の成果について語り合った。(撮影・取材・文：石井 蓮)

特定非営利活動法人ワセダクロニクルは今年3月、早稲田大学ジャーナリズム研究所によって設立された。編集長は、朝日新聞で調査報道を担当し、製薬会社から医師への資金提供の実態などを報じて成果を上げた渡辺周さんが務めている。現在メンバーは大学生10人、プロが15人。調査報道機関に加えて、ジャーナリスト育成機関としての役割も担う。おもに寄付金で運営されている。

道では、ものすごくディフェンスを大事にしているんです。企業に対し問題点を突きつける調査報道は一見攻撃的な報道に見える。しかし記事の発表に至るまでには地道な積み重ねがある。

調査報道は足で稼ぐ。記事を書いた記者やその記事で取り上げられた学会の医師まで、あらゆる関係者に取材し、自分たちの掴んだ情報の信ぴょう性を高めていく。記事の内容によっては相手から名誉毀損や営業妨害として訴えられることもある。公に発表された情報で報道したならば、責任はその発表元になるが、独自で掴んだ情報を使うこの調査報道では、その責任は記者たちが負わねばならない。

経済基盤が課題

第一シリーズである「買われた記事」では、広告会社が仲介して、製薬会社から通信社に報酬が払われ、記者が製薬会社の特定の医薬品について広告まがいの記事を書いていた実態を報道した。

もし訴訟になったときに、記事の撤回、訂正という事態を避けるため最善の準備をする。書きあがった記事は入念に確認。一つの誤字があるだけでも、内容に誤りがあると批判の対象になってしまいます。

だが、始まったばかりのワセダクロニクルには課題もある。運営のために集めた寄付金では、情報源となる人物に会いに行くなどの取材費を賄うのがやっとなのだ。

調査の始まりは、医薬品の記事に対して広告会社から通信社へ報酬が払われたという資料を入手したことだった。そこから関係者にインタビューを行い、記事を作成。その後何度も通信社と質問状などでのやりとりを続け、ついには通信社側に事実関係を認めさせるまでに至った。

渡辺さんは語る。「調査報道では、ものすごくディフェンスを大事にしているんです。企業に対し問題点を突きつける調査報道は一見攻撃的な報道に見える。しかし記事の発表に至るまでには地道な積み重ねがある。

「誰かがしないと日本の社会で本当の情報に触れられる手段がなくなってしまう」。調査報道にかける思いが渡辺さんにはある。